



守護聖姫

アルテア ガードィアンズ

ALTAIR
GUARDIANS

催眠恥辱に堕ちる姉妹

立ち読み版

小説 火村龍

挿絵 くらいわしんじ



闇を打ち払う赤き光！

アルテアローズ！



みずの れな

水野麗奈(アルテアローズ)

「力の鍵」を宿す少女。ヒプノスと敵対する次元連合から受け取った光の衣「アルテア」の力を使って、地球を守るために戦っている。学校では水泳部に所属する真面目な女学生で知られており、男女問わず人気の的である。

みずのかりん

水野花凜(アルテアマリン)

麗奈の妹で、姉と同様に「力の鍵」を宿し、「アルテア」の力でヒプノスと戦っている。姉と比べて未熟なのを気にしているのだが!? 小動物的な可愛さで、麗奈と同じく学校の人気者。水泳部の顧問である新條に懐いている。



闇を浄化する青き光!

アルテアマリン!

ヴェルカ

地球に突如現れた怪物軍団「ヒプノス」の女幹部。とてつもないサディストで、得意の催眠術を使って麗奈と花凜を牝奴隷へと堕とそうとする。



プロローグ	幻想の光、アルテア	007
一章	守護聖姫	010
二章	植えつけられる使命	031
三章	催眠	073
四章	肉便器ヒロイン	085
五章	マゾ牝ローズ	119
六章	街の搾精戦姫・アルテアガーデンアンス	151
七章	狂う学園	183
八章	催眠解除	216
エピローグ		263

プロローグ 幻想の光、アルテア

「あなたたちに聞つてほしいの」と、ルリアと名乗った光が言った。少女の声だ。歳は自分たちとそう変わらないだろう。麗奈は震える花凜の身体を抱きしめた。

「ヴェルカはどこまでもあなたたちを追ってくる」ルリアはそう続けた。

麗奈と花凜は暖かな光で囲まれていた。それらは、二人を勇気づけるように踊っていた。数分前の地獄絵図とは真逆の光景だ。麗奈と花凜、一つ違いの姉妹を追つ手の魔の手から救い、この結界——麗奈はそう感じた——に保護してくれている。

しかし、二人の脳裏には先ほどの光景が焼きついて離れなかった。

陵辱される少女、跡形もなく消える男。破壊される街、なぎ倒される街路樹。

それらがすべて、一人の黒装の少女ヴェルカと、暗黒の男たちによつてもたらされたものだとはわかには信じがたい。物語の中の話だと思つていたことが、目の前で起きている。それは光と闇の対立であり、正義と悪のぶつかりあいであった。

「あなたたちの中には鍵がある」ルリアが言う。「鍵？」と、麗奈が答える。花凜は震えている。花凜がいなければ、自分はパニックを起こしていただろう。わき上がる記憶の奔流をせき止め、花凜の存在をたぐり寄せて自分を保つ。麗奈の思考は、ルリアの言葉の意味を呑み込みながら別のことを考えている。それは主に花凜のことだった。冷静に、冷静

に。一步間違えれば花凜を失う。たった一人の家族を失ってしまったえば、自分はある家の一
人であることには耐えられないだろう。花凜は震えているが、その目はしっかりと麗奈と
光に向いている。花凜は感受性が強く、素直で純粹無垢、そして気弱だ。しかし実は、心
は自分より強いかもしれないと、麗奈は感じていた。

「鍵は力。そして命。この地球という惑星の生命。ヒプノスはそれを狙っているわ。奪わ
れれば地球はゆっくりと死んでいく」

「それがどうして、わたしたちの中に？」麗奈は問う。

「あなたたちの精神が強く、そして鍵を受け入れる器を持っているから」ルリアが答える。

「わたしたちよりも、エナジーの量が多い」とも言う。

「やらああっ！ み、見ないでっ！ ひいいいっ、イクッ、イッちやううっ!!」
「ダメだっ！ そんなこと……ぐっ、ぐあああっ!!」
「助けて、誰か助けてええっ!!」

頭の内側で悲鳴が暴れ回り、麗奈は右手で耳を塞ぐ。

幻聴だ。先ほど聞いた悲鳴が耳にこびりついている。あの中に友人はいなかったか。麗
奈は思い出そうとしたが、破碎される街の中で、人々の影はおぼろだった。だが、少なく
とも陵辱された女の子たちの中に、二人の知りあいはいなかったように思う。

あの中に花凜がいたら——。麗奈は背筋が凍りつく。悲劇などという言葉では片付けら
れない。許せない蛮行だ。悪魔の所行だ。

「闘って欲しいの」ルリアはもう一度言った。

麗奈は、ふと自分の右手が暖かいことに気づく。耳を押さえていた手が花凜に握られていた。いつの間にか妹の震えは止まっていた。

「イヤだと言ったら？」麗奈は訊いた。自分一人ならともかく、花凜を危険な戦場に放り込むなど。たとえ、それが正義のためでも。

「わたしがなんとか、あなたたちを守りながら逃げ回ってみる。連合の救援が来るまでね」
光の騎士ルリアは、遙か彼方から光のエナジーを飛ばし、自分たちを守っていると言った。麗奈は迷った。この闇を止めなければ、いま逃げても、奴らは追ってきて被害が広がるだろう。ここで止めなければ、否、力があるのなら、止めたい――。

「やります」

そう言ったのは、麗奈ではなく花凜だった。麗奈は花凜を止めようかと口を開き、止める言葉を持っていないことに気づいた。

二人の前に赤と青の光が現れる。結界内に漂うどの光よりも輝く力の塊だった。

「この力の名はアルテア――かつて、人の心に宿るエナジーを引き出し術を生み出した女神の名を冠した光よ。これを受け入れれば、あなたたちは光の衣を纏うことができる。あなたたちもエナジーを引き出して、わたしたちと同じ力が使える。ヴェルカに對抗できる」
二人は光に手を伸ばす。麗奈は赤に、花凜は青に。二人は光に包まれる。

一章 守護聖姫

真夏の午後、学園のプールで泳いでいた水野麗奈は、ふと妹の花凜が見当たらないことに気がついた。指導教官である、新條沙弥教諭の姿もない。

（花凜、また新條先生と話し込んでるのね）

麗奈はプールサイドに両腕をかけ、水の冷たさを気持ちよく感じながら、ぷくつと頬を膨らませた。プールの近くにある指導室で、新條教諭手作りの美味しいお茶でも飲みながらくつろいでいるのだろう。

麗奈と花凜が所属する水泳部は、今日は本格的な練習を終え、おのおのプールで泳いだり、プールサイドで話し込んだりしていた。

麗奈はプールから上がると、縁に腰掛けキャップを取った。濡れた長髪が解き放たれ、水が滴った。

水野麗奈は、学園内で並ぶ者がいないほどの美少女だった。背中の中程まであるしつとりとした黒髪に、人形のように小さな顔。顔立ちは一見、絵画から飛び出してきたような、完成された美しさを持っているように見えるが、一度笑った顔を見れば、その印象は一転、とても可愛らしい少女に変わるだろう。うっとりするほど長い睫毛に水滴がつき、一度瞬くとはらりと頬を伝う。濡れた頬は夏の陽射しを浴びてうっすらと桃色に色づき、血色の

よい唇はぷるぷるとみずみずしい。日焼けした少年少女の中、麗奈だけは雪のような白い肌を保っていた。

そして、その美貌と同じく、いやそれ以上に、麗奈の身体は魅力的であり、同世代の少女とは一線を画したものであった。

肉感的でありながら、引き締まった身体つきをしている。女性らしく肉の乗った二の腕と太もも。プールサイドについた手はほっそりと繊細で、濡れた髪をすく指先の動きそれ一つで男子の視線を集める。また、太ももからふくらはぎにかけての脚線美は、男子はおろか女子ですら虜になるほどだ。膝から下は未だプールに浸け、びちゃびちゃと水を跳ね上げる無意識の遊びに、どこからかため息が漏れた。

極めつけは、水着を押し上げる豊乳とヒップである。Dカップどころか、Eを超えFに近いのではないかというほどの乳房だ。だが、決して垂れることなくツンと張って、その存在を主張している。ヒップも同じように大きく、体重がかかってコンクリートにむにりと広がる様に、思春期の男子はいけないと思いつつも視線を外せず、よからぬ妄想を抱かずにはいられない。またほどよく引き締まったくびれ、筋肉質ということはなく女の子らしく少しだけむっちりとしたお腹も、彼女の隠れた魅力だった。麗奈の与り知らぬところだが、彼女と彼女の妹を目当てに水泳部に入部する男子もいるほどであった。

とにかく美しく、そして蠱惑的な身体を、麗奈はぴっちり競泳水着に押し込めている。部活では競泳水着とスクール水着が半々だったが、麗奈は泳ぎやすさをとにかく追求し、

競泳水着を着用していた。

「麗奈先輩！ 今日も記録更新しましたね。すごいです」

水と戯れる麗奈に、後輩たちが話しかけてくる。緊張している様子だ。

「ありがとう。あなたも自己記録更新おめでとう」

麗奈の言葉に、後輩は「見ていてくれたんですか!! ありがとうございますっ」と何度も頭を下げて喜んでいた。

「いいなあ、花凜ちゃん。こんな素敵なお姉さんがいて」

「そう？ 普通だと思うけど」一つ歳下の少女たちの褒め言葉に、麗奈はムズ痒い感覚に襲われ、苦笑混じりに肩をすくめた。

「そうですよ！ いっつも仲がいいし、花凜ちゃんなんて、いつもお姉ちゃん、お姉ちゃんって言うてるんですよ」

「新聞だって、毎日のように麗奈さんと花凜ちゃんが載ってるし」

「あ、ああ……あれね。あれは、ええと……恥ずかしいわね……」

興奮気味にしゃべる後輩たちに、麗奈はたじたじになる。彼女たちが話しているのは、学園の廊下に貼り出される、生徒たちが編集する学園新聞のことだ。確かに、自分たちが載っていることが多かったが、そのたびに、麗奈と花凜は身体を小さくしてみんなの視線を逃れようと一生懸命になるのだった。

「でもでも、麗奈さんも花凜ちゃんも素敵だけど、最近はある人たちもいいなあ」

その台詞に、麗奈の心臓がどきりと跳ね上がる。後輩たちはそれに気づかず「アルテア ガーディアンズでしょ！」と黄色い声を上げた。最近、学園新聞どころか、街全体を賑わす二人組の呼び名だ。

「うん、ヒプノスが出たときはもうダメなのかなって思ったけど……」

一人が暗い顔をすれば、もう一人が「でも、アルテアガーディアンズがいれば大丈夫だよ」と頷く。

「ね、麗奈さんっ」

後輩たちの眩しい笑顔に、麗奈は微笑み、頷いた。

「ええ、きつと。彼女たちはあんな悪い奴には負けないわよ」

麗奈がそう答えたときだった。穏やかだった午後の日常は、麗奈だけ突如反転した。

《助けて、お姉ちゃん……ヒプノスが……あああつ！》

ゾワツと、麗奈の背筋が凍りついた。頭の中で花凜の声が反響していた。周りの人には聞こえない、彼女にのみ聞こえる声だ。それは決して幻聴ではない。その意味、その危険性を、麗奈だけが知っている。

「ごめんなさい。今日はこれで上がるわね」

麗奈は平静を装い、談笑する後輩たちに告げると、返事も聞かず足早に更衣室へ向かった。途中、部員の女の子とすれ違う。彼女は楽しげにおしゃべりしている男子や女子に、「ヒプノスがまた出たって！」と叫んだ。それを聞いた水泳部員たちは皆、「またかよ」「この

ままじゃ不味いんじゃないのか」と、顔を見合わせる。

麗奈は足を止めちらりと彼女たちに振り向き、「なんで……!?」と、いつもの彼女らしくくない焦った様子を見せた。

「アルテアマリンが来てくれたって……。でも、なんだか苦戦してたみたい」「マリリンが……? アルテアローズはどうしたの!?」「わからない……。でも、捕まった人たちはマリリンが助けたって」

耳に入る言葉に、麗奈の足はさらに速くなった。

(違う、マリリンは、来たんじゃない——)

仕舞いには全速力で走り、更衣室に飛び込んだ。中には誰もいない。花凜の鞆も置きっ放しだ。途中見た教師室の窓にはカーテンが引かれていた。だが、そちらを尋ねるまでもない。更衣室の中央に、ふわふわと浮かぶ水色の霧がある。麗奈にしか見えないものだ。麗奈は指先でそれに触れた。その途端、いくつもの情景が麗奈の脳裏に浮かび上がった。

更衣室に戻った花凜、突如現れる裂け目、それに呑み込まれる花凜——。場所は市街地、大通り。悪の組織ヒプノスの結界が張られている。

(やられた——！ でも、追える……っ)

麗奈は、花凜が残した霧に精神を集中させた。その途端、競泳水着に身を包んだ少女の媚体が赤い光を放ち始める。

力の息吹を感じる。地球の科学では解明できないこの力。それが、麗奈を花凜のもとへ

と導く。こみ上げたエナジーが麗奈を包み込み、解き放たれた。

次の瞬間、麗奈の姿は蜃気楼のようにかき消え、赤い光と化した。そして、更衣室の窓から外に飛び出し、市街地へ向けて一直線に飛んでいった。

*

街の中心、繁華街の大通りに、紫と黒を混ぜたような、毒々しい色をしたドームが展開されていた。外部からのあらゆる干渉を拒絶するその空間から、何人もの男女が飛び出してきた。女は服を切り裂かれ羞恥と恐怖に怯えていた。男たちは股間を押さえ、苦しうに顔を赤くして、人々の輪を抜けて逃げていく。

人々はドームを遠巻きに囲み、男たちが飛び出してきたときには一瞬明るい表情に戻ったものの、それ以降は祈るような顔でドームを見つめていた。

「お願い、アルテアガーディアンズ……」

人々はドームの中で闘う、正義のヒロインに祈った――。

ドーム――突如地球に侵攻してきた怪物軍団ヒプノス、彼らの展開する結界内。

「ひぐううっ！ んぐ、はぐぐううう……」

青と白を基調としたコスチュームに身を包んだ少女が、両手両足に巻きつけられた鎖を、周囲を取り囲む漆黒スーツの男たちに引っ張られていた。少女は手袋をはめた腕で鎖をつかみ、ブーツで地面を踏みしめ必死に抵抗していたが、明らかに苦しそうだった。

可憐な少女であつた。ふつくらと丸みを帯びた頬に、ぱっちりとした瞳。柔らかな曲線を描く細眉に、桜色の唇。夏の陽射しを弾く雪のように白い柔肌が、陥つたピンチに赤く染まつている。悔しげに寄せた眉に引き結んだ唇、敵を睨みつける潤んだ瞳——実年齢よりも二つ、三つは若く見える童顔の美少女だ。肩のあたりで切りそろえた水色髪をツーサイドアップにしているのも可愛らしい。そして極めつけは、幼顔を引き立てる、同世代の少女よりも頭二つ分は小さな身体だ。そのくせ、身体が描き出す輪郭は、他の少女たちよりも遥かにグラマラスなものであつた。姉に似たむっちりボディは、熟れに熟れたメロンを思わせる二つの爆乳に、少しでも動けば大事なところが見えてしまいそうなほど短いスカートを押し上げるヒップ、そして鎖の締めつけに抵抗し、ふるふる震える太ももや二の腕と、女の子の魅力をこれでもかと詰め込んだ魅惑的なものであつた。

さらに、その可愛らしさを何倍何十倍にも引き上げるのが、少女の纏うコスチュームだ。豊満な胸、ムチムチとした肢体を、すべすべした白の密着インナースーツと、淡い青を基調としたドレス型スーツが守っている。少女が腰をくねらせるたびに揺れる水色スカートのでせいで、危うく中が見えてしまいそうだ。両手と両足には、ともに純白の長手袋と、ちらりと覗くハイソックスが可愛らしい、膝下までのローヒールロングブーツ。それぞれに、可憐なりボンと、青いラインの装飾が施されている。

およそ戦闘とは無縁に見える衣装ではあるが、その見た目に反して、秘められた力は、地球に存在するすべての兵器を相手取って軽々と勝利を収めるほど強大なものだ。

少女の名はアルテアマリン。突如現れたヒプノスに対抗する二人組の美少女戦姫、アルテアガーディアンズの一人だ。

しかし、そのスーツを身につけ、身体能力も格段に向上した少女に相對する者も、それに勝るとも劣らない力を持った者どもであった。

「こうなっちゃ、アルテアマリンもおしまいだな」「エナジーが切れたときがお前の弱点だつてことくらい、わかっているんだよ」

鎖を握る男たち——異次元の侵略者ヒプノスの戦闘員が、勝ち誇つたように叫ぶ。

「はうう……は、放してっ！ アルテアマリンは、ま、負けませんっ」

マリンも負けじと言い返した。だが、勇ましく叫ぶものの、両手両足の拘束から逃れることはできず、苦しそうに肢体をよじっている。

マリンの足下には、彼女と同じく水色を基調とした銃型のアイテムが落ちていた。マリンが腰に装着している武器、蒼銃マリンプラスタード。ウオーターガンのような造りをしたものの、エナジーを込めるタンクが開きっぱなしになっている。弾のエナジーが尽き、再装填をしようとしたところを狙われたのだ。

「ハハッ！ ようやくマリンを捕らえたぜ」「手こずらせやがって、どうしてやろうか」

勝利を確信した戦闘員たちは、己の本能を抑えきれず、股間を膨らませていた。

朦朧とする意識の中、ヒプノスの性欲をよく知るマリンが唇を噛みしめたそのとき、境界の中が赤い光に満たされる。

「なにっ!?」 「この光……クソッ!!」

戦闘員たちが毒づく。この光の正体を、マリンもヒプノスもよく知っていた。

「待ちなさいっ!」

赤い光とともに結界の中に降り立った水野麗奈は、凜とした声と鋭い眼光で、マリンを苦しめる男たちの注意を自分に集めた。麗奈に気を取られた男たちの力が緩む。

「やあああっ!」

その隙を逃すマリンではなかった。素早い動きで拘束を逃れ、麗奈のもとへ飛ぶ。

「マリン、大丈夫!」

「うん、なんとか……。ありがとうお姉ちゃん」

麗奈はマリンを気遣いながら戦況を分析する。未だ戦闘員は数十人残っているものの、それ以上の戦闘員がマリンに倒されている。一瞬、麗奈は腑に落ちない表情を浮かべたが、
「アハハハッ! 現れたわね水野麗奈——いえ、アルテアローズ!!」

戦闘員たちの背後から上がった艶めいた声に素早く構えた。声の主は、露出の高い黒と紫の衣装に身を包んだ妖艶な美少女だ。麗奈とそう歳は変わらないが、纏った雰囲気は麗奈たちと真逆の、サディスティックなものだった。

「ヴェルカっ!!」

現れた少女を睨み、麗奈は拳を握りしめた。彼女こそ、地球に侵攻するヒプノスの司令

官であり、アルテアガーディアンズと何度も死闘を繰り広げた宿敵、ヴェルカであった。

「残念ね。もう少しでマリンを捕らえられたのに……。フフ、でもいいわ。あなたを屈服させる方が昂奮するものね!!」

悠然と、しかし瞳にはギラギラと敵意を燃やし、ヴェルカは戦闘員の前に進み出た。

麗奈はそれに呼応するように、膝をつくマリンの前が出る。麗奈の瞳にも、ヴェルカに勝るとも劣らない闘志が滾っていた。

「やってみなさい、わたしたちは負けないわ。チェンジ・アルテアローズツツ!!」

麗奈は声高く叫ぶ。その途端、少女の身体から赤い光が放たれ、結界内部を満たした。眩い光にヴェルカは目を覆う。戦闘員たちが手に持った鎖や銃で攻撃を仕掛けるも、光はバリアとなつてことごとく攻撃を弾く。

温かな光の中で、麗奈はか弱い少女から、人々を守り悪と闘うヒロインへと変身する。それは戦いへ赴くための神聖な儀式であり、また昂揚感と恍惚感に包まれる甘美な瞬間でもあった。

着ていた水着が弾け飛び、麗奈は一糸纏わぬ裸体となった。傷一つない媚体を、光がすぐるように撫でていく。少女は頬を染め両手を広げた。純白の紐パンティが、ポリユームたつぷりのヒップ、ぶりぶりと盛り上がった無毛のデリケートゾーンを包み込む。大事などころを保護する薄布に濃厚なエナジーが込められ、ぴったりと肌に吸着した。マリんと同じく、滑らかで光沢感のある純白インナースーツが上半身にぴっちり張りつくと、

彼女とは色違いの赤いドレス型スーツがインナーの上から麗奈の豊満な身体を包み込む。「んっ、あんっ」と悩ましげな声を上げ脚を振ると、つま先から腰までを守る黒いパンストが装着された。仕上げるに、両手を叩けば長手袋、脚を撫でればハイヒールロングブーツと、それぞれ白を基調に赤のラインが入ったものが現れ、乙女の手足を守護するとともに、その美しさを一層引き立てる。最後に、瞳と髪の色が赤みがかつたピンクへと変化すると同時に、変身は完了し、バリアを張っていた光がエナジーに転換され、コスチュームの各部に収束する。腰にはコスチュームと同色の、バトンが現れた。

「闇を打ち払う赤き光、アルテアローズ！ ヒプノス、覚悟なさい」

地面に降り立ち堂々と宣言する麗奈——アルテアローズに対し、ヴェルカは「行きなさい！」と戦闘員に号令を下した。四方八方から鎖と銃撃が飛び、その間隙を縫うようにして剣や鈍器を持った男たちが走った。統制の取れた連撃がローズを襲う。

対するローズは眉一つ動かさず、腰の武器を引き抜く。赤と白に彩られた聖なる武器、ローズバトンだ。そして、一気に振り抜いた。

「赤き力よ、闇を打ち払え。ローズウィップ!!」

柄の先から飛び出す光のリボンが、飛来する銃弾や鎖、戦闘員どもをまとめて払いのけた。リボンはローズの思うままに動き、落ちていたマリンの銃を搦め捕って引き寄せる。

「マリン、これをつ」

「ありがとうローズっ」

マリンはまだ苦しそうに呼吸をしていたが、その闘志はローズに劣るものではない。立ち上がり、ローズに投げ渡された銃を受け取ると、「水の力よ……わたしに力を」と、タックに自身のエナジーを注ぎ込む。

並び立つ赤と青の戦士は、お互いに身体を密着させ、可憐かつ勇ましいポーズを決める。「人々を苦しめ、地球を滅ぼそうとするヒプノス、このアルテアローズが許しません！」リボンを振るローズが言い放せば、

「二人が揃えば、勝てない相手なんていません。この星はわたしたちが守ります！」マリも銃を構え敵を睨む。そして、声を揃えて叫んだ。

「守護聖姫アルテアガーディアンズ、ここに降臨!!」

少女戦士の勇ましい名乗りは、ヒプノスへの挑発に等しい。戦闘員たちの殺気と情欲が膨れあがる。それは彼らを率いる女騎士ヴェルカも同様だ。

「チィッ！ 生意気な……っ。ローズウウツ!!」

闇騎士が狙うのはただ一人、赤い少女だ。

先ほどの四方からの攻撃、マリンであれば凌ぐのがやっつとであろうそれを容易くはね除ける赤きヒロインに、ヴェルカは拳に黒い炎を纏って疾駆した。

「その中にある、鍵、今日こそ奪ってやる！」

「ヴェルカ、あなただけはここですっ!!」

ローズも、冷静沈着なお姉さんの顔に隠れていた激情を覗かせ、リボンを振り前に出る。

絶世の美少女同士、しかし真逆の道を歩む両者が激突した。赤きリボンと黒き炎、一歩使い道を誤ればすべてを破壊しかねない危険な力が暴風雨のごとく吹き荒れた。結界がなければ周囲は更地にならわっているであろう、壮絶な戦闘であった。

「ヴェルカ様を援護するんだ！」「食らえローズ……ぐあああああっ！」

一歩も譲らない女戦士の戦いに加勢しようとする戦闘員を、純白のブーツが蹴り飛ばした。ピンチに陥りながらも、市民だけは救ってみせた小柄なヒロイン、マリンド。

「ローズはやらせませんっ！ あなたたちの相手はわたしよっ!!」

もはや、ローズとヴェルカは互いのことしか目に入っていない。そんなローズの邪魔をしようとする戦闘員たちの間でマリンは可憐に舞う。右手に持った銃をそのままに、近寄る戦闘員を鋭いハイキックや回し蹴りで吹き飛ばした。

「ぐうっ！ だが効かないぜマリリン。姉とは大違いだな」

「さあ、また苦しめて、ひいひい言わせてやるぜ」

戦闘員たちは呻きながらも蹴りに耐え、下卑た笑みを浮かべマリリンに迫る。その股間はマリリンがキックを放つたびに膨れあがり、純情な少女を赤面させた。

「闘ってる最中に……！ ううっ、こいつらあっ」

「ほらほら、もつと蹴ってみろよ」戦闘員たちがニタニタ笑いながら挑発する。だが、ローズが隣にいてくれるマリリンは気圧されてばかりではない。

「ふ、ふんっ！ 調子に乗ってられるのもいまのうちよっ！ 青き力よ、闇を浄化せよ。」

「マリンショット・バブルシャワー！」

マリンの蒼銃、その銃口が輝いた。放たれるのは無数の水泡だ。マリンのエナジーが込められたそれが、戦闘員に着弾すると同時にエナジーを叩き込み、力を奪っていく。

「なにつ!? ぐあああああ」く、くそ……!」

戦闘員が一人残らず倒れ伏す。そして、ローズとヴェルカの戦いにも終止符が打たれる。「クッ……もうやられたの!? 早すぎるっ」

マリンと部下の戦いの末を見、舌打つヴェルカ。その漆黒のコスチュームには細かい傷が無数についている。ローズの猛攻を、さしものヴェルカも避けきれなかったのだ。

「どんな卑劣な手を使っても、二人揃ったわたしたちには勝てないわっ! ハアアッ!!」
敵首領にできた決定的な隙をつき、ローズが裂帛の気合いを込めてリボンを振るった。

「しま……あぐううっつ!!」

ヴェルカは咄嗟に手で身体を庇ったが、受け流せずに大きく吹き飛ばされる。さらにリボンの端が頬をかすめ、美貌にツツと赤い血が流れた。

「いまよマリン!」「うん、ローズっ」

美少女ヒロインは互いに呼びあい、ぴったりと寄り添った。己の武器を仕舞い、手を取りあつて敵に向ける。体勢を崩したヴェルカ、そして倒れた戦闘員に、アルテアガーディアンズの必殺技が放たれた。

「アルテア・エナジーブレイクッ!」



重なりあう二つの声、赤と青のエナジーが螺旋に絡まって、悪を討つ金色の光となる。迫る光を見、ヴェルカは腕を交差させた――。

「直撃っ！ やったあつ!!」

マリンは飛び上がって喜んだ。ローズも構えは解いていないが、表情の端に喜びが滲んでいる。二人はヴェルカと幾度も干戈かんかを交えてきたが、必殺のバーストを直撃させたことはなかったのだ。弛まぬ訓練を積み重ねてきた成果だと、ローズは拳を握った。だが。

「うそ……」「……くっ……」

安心するのはまだ早かった。ヒロインたちの表情が引き締まる。

煙の中から、ヴェルカが姿を現したのだ。歴戦の戦士は、アルテアガーディアンズの渾身の一撃を浴びてもまだ倒れない。しかし、ダメージは相当深く、立っているのがやっとのようだ。恐ろしい治癒力で傷が治ってはいるが、戦闘はとてできないだろう。

「はぁ、はぁ……!! や、やるわね……。今日のところは退かせてもらおう」

黒衣の女戦士は腕を振ると、転移ゲートを召喚し、倒れた戦闘員たちを吸い込んでいく。「待ちなさい！ 今日こそは逃がさないわ!!」

「フフ。わたしの心配より、妹の心配をした方がいいんじゃないかしら？」

「なんですって……っ!! マ、マリッ!?」

「決まっています！ あなたたちの、お……お精子、このアルテアマリンが全部、し、し……搾り取ってあげます!!」

マリンは倒れた戦闘員の上に馬乗りになった。その表情は真剣な変身ヒロインそのものだ。平和を、地球を守る使命を全うするのだという決意に対し、その行為のあまりにも淫猥な様に、ヴェルカのサディスティックな笑みは一層濃くなり、甘い吐息が漏れていた。

「くっ……俺たちをどうするつもりだ」

戦闘員は苦しがるフリをしているが、口元には抑えきれない笑みが浮かんでいた。それは股間にも現れている。黒い戦闘スーツの股間が盛り上がり、ひくつく。戦闘員はすでに昂奮状態であった。

（や、やるの……。マリンのコスチュームは、男の人を気持ちよくするためにあるんだから……）と、マリンは自分に言い聞かせる。催眠にかかったマリンからすれば、戦闘員が股間を膨らませているのは、自分の搾精スーツの「攻撃」が効いている証拠なのだ。

ヴェルカがかけた催眠は、パンティを脱ぐことだけではない。それよりもっと屈辱的で、恥辱にまみれた暗示が、マリンの正義のヒロインとして在り方をねじ曲げていた。

マリンは、敵を倒すためにその精液を——ヴェルカのような女性を相手にするときには絶頂とともに溢れ出る大量の女の淫汁を——搾り取らなければならぬ。それが、敵を倒すための唯一の攻撃手段であり、アルテアのスーツはそのために存在している。そのすべらかで美しいコスチュームは、牡を昂奮させ、ペニスをいきり立たせ射精に導くためのもの

だ。手袋から、ボディスーツ、ハイソックスからブーツに至るまで、すべてが搾精のための武器。しかしそれらは逆に、マリンの弱点でもある。スーツに精液や穢らわしい牡の汁を塗りたくられ、愛撫されていく。攻撃を受けると、変身ヒロインの身体は熱く発情していく。それは、スーツの間から覗く美しい雪の肌も同様だ。肌を覆うアルテアエナジーはイヤらしい責めに反応し、少女の心を淫らにかき乱す。そして、敵より先に絶頂してしまえば、闘う力を失い、搾精スーツを着ただけの敗北少女に成り下がる。何度も負ければ、アルテアマリンは正義のヒロインではなく、ただの牝豚性奴隷に堕ちてしまうのだ。

また、腰に提げた銃や徒手空拳による物理攻撃などは相手を拘束し、自分が得意とする淫楽責めのフィールドに引きずり込むための前段階に過ぎない。もし武器などの攻撃で倒してしまえば、奴らはまた復活してしまう。

実際に復活することなどあり得ないし、正義のためのコスチュームが牡の精液を搾り取るために存在し、ましてやそれを愛撫されれば感じてしまうなどという、娼婦まがいのものであることなどあり得るはずがない。だが、マリンにとってはそんな荒唐無稽な設定こそが常識だった。

「こ、こうするんです……っ！ やああああっっ!!」

マリンは一気に、戦闘員のスーツを引き裂いた。途端に、荒々しい男槍が、ぶるんぶるんと激しく頭を振りながら飛び出し、天を向いてそそり立つ。

「ひやああああんっ!!」

マリンはたまらず悲鳴を上げてしまった。肉棒は二十センチはあろうかという大きさで、太さに至ってはマリンの片手に余るほどの代物だ。

（おっかしい……！ こんなものを……。ううん、弱気になっちゃダメっ。頑張るの。マリンはずっと、イメージトレーニングしてたんだから!!）

ごくりと、自分の喉が音を鳴らしたのがわかった。牡のペニスは、マリンの姿に昂奮しているのだろう、ビクンビクンと、陸に打ち上げられたばかりの魚のごとく暴れ回っている。マリンはいよいよ覚悟を決め、その巨大な棒を両手で握りしめた。

ヴェルカの催眠により、ローズに追いつこうと必死に鍛錬した記憶は、肉棒を握りしめ、口で咥え、秘部で扱しき——という、淫楽のイメージトレーニングを積んでいた記憶に変わっている。エナジーを操る鍛錬も、すべて搾精スーツの力を高めるためのものだったと、変身少女の中では認識されているのだ。

「おうっ！ マリンの手袋、すべすべしてて気持ちいいぜ。危ないな、触られただけで射精でちまうかと思った」

戦闘員の言葉に、マリンは頬を赤く染める。だが、これは鬨ないなのだ。恥ずかしがってはいけない。地球を守る正義のヒロインが、こんなことで動揺してはいけない。

「当たり前でしょ！」マリンは堂々と叫ぶ。自分の理想とする正義のヒロインのように。凜とした姉のように。

「アルテアマリンに扱かれて、しゃ、射精しない男の人なんていないんだから……！」



「大きなお尻ね。すべすべで汗まみれの精液まみれ……変態のあなたにぴったりだわ!!」
 ピシッ! ピシイイッツ!! ヴェルカの声は途中からサディスティックな色を帯び、最後には哄笑を伴った叫びに変わる。同時に鞭が淫猥な空気を裂きながらローズの桃尻に迫った。痛々しくもエロティックな快音が響き渡る。

「あひっ! あひいいいっつっ! お、お尻いつ! おおうつ、くお……きやああんっ」
 声の質が明らかに変わった。ローズは牝豚のような悲鳴を上げ、いまままでにない反応を見せた。ブーツのつま先が反り返り、陸に揚げられたエビのようにピクピクと跳ねる。表情も、おしおきをねだる女のそれから、ただ快楽に吞まれそれ以外にも考えられない牝豚のものとなり、目を、口を全開にして喘いでいる。だからだと涎が零れ垂れ落ちる。

「ああっ! ローズ、なんて顔を……そ、そんな顔するなんて……お、お姉ちゃん……!」
 変身しているのに、マリリンが「お姉ちゃん」と呼ぶことがその動揺を表している。だが、マリリンの動揺は意味が違った。姉を愛する妹ヒロインは新たな性癖に目覚めようとしていた。漏れる愛液の量が明らかに増えている。青き戦士は、あるうことか叩かれ感じている姉の無様を見て悦楽を覚えていたのだ。

ピシッ、パシイイッツ、パツシイイイインツツツ!! ヴェルカの連撃がローズを襲う。ヒップから太もも、触手に挟まれむにりと張った肉を的確に打つ鞭は、ローズを被虐性感の彼方へと誘う。奪われたローズパトンで叩かれているという事実が屈辱快楽として上乘せされ、悦楽に目覚めいままさに気づかぬ内にマゾ奴隷に墮とされている真面目なヒロイ

「あが……はへっ、ひあああつつ!! ひっ、ひいんつつ」

(ダ、ダメージが、あああつ!! こ、こんな激しい攻撃いつ!!)

敗北の足音が近づいていた。いや、むしろここまで耐えていることが奇跡に近かった。普通の人間なら怪悦に狂い、マリンですら何度も絶頂してしまっているだろう。マゾの素質を開花させながらここまでローズが絶頂を堪えられているのは、自身の強靱な精神が、力尽きる前に敵を射精させるのだと、まだ思い続けているからに他ならない。しかし、どれだけ精神が強くとも、肉体の限界はどうしようもなかった。

「もつと犯すのよ! アアッ、いいわ! いいわローズ!! その顔が見たかったの! もつと、もつと見せて、さあ、無様にいき狂う顔を見せなさいッ!!」

ヴェルカの哄笑と叫びは、昂奮のあまり裏返っていた。空を裂く鞭はいまや暴風のように荒れ狂っていた。

「ぐううっ! 射精すぞアルテアローズ! 貴様の膣内に、身体に、俺のすべての精液を射精^だし尽くしてやる!!」

怪人も叫んだ。獐猛な獣は、ペニスに伝わる感触から正義のヒロインが絶頂寸前にあることを感じ取っていた。ローズの膣は何度も収縮を繰り返し、ペニスを奥深くまで引き込もうとしている。化け物級の肉棒を咥え込んだ秘部はたつぷりと魔のエナジーを受け、いつの間にか陰唇がびらびらと伸び、淫猥な牝花弁へと成長していた。

(射精させれば勝てるっ! もつと昂奮させなきゃっ! あああっ! なのになんでっ、



「ふにゆうっ！ ま、待って、扱くから、舐めるから、いやああんっ！ そ、そんなに触られたら……ああっ、ち、力が抜け……エナジーが……ひきいっ!!」

そして、マリンもまた、奉仕する余裕はなかった。青き小柄な戦士は、ローズと違ってまだ快楽に屈服しているわけではないが、間近で姉が叫ぶたび、びしゃびしゃと愛液を漏らしていた。ローズの嬌声はマリンにとって甘い媚毒に等しい。そして愛液を漏らしたところを、男たちに性感帯を弄くりまわされてしまう。ペニスを持ち上げた手がぶるぶる震え、開いた唇は涎と嬌声を漏らすばかり。もう、小柄なヒロインの媚体は、完全に肉棒の支配下に置かれてしまっている。

「もう手コキする余裕もないか」「なら、とつととイかせてやるぜ」

ぐじゅっ、じゅぽぽっ！ ぬっぷっつ、ぐじゅっ、にじゅるるっ！ いやらしい粘膜音が絶え間なく響く。ついに、マリンの肉体が限界を迎えようとしていた。

(ひぐうっ！ こ、こんな、恥ずかしいの……ああっ！ マリンもうだめえっ)

「オオッ！ 膣内が締めりやがる……ッ、マリン、イクんだな!？」

「ローズはもうイきっぱなしだぜ！ おい牝豚、とつととイクって叫んだらどうだ!？」

「あひいっ！ しょ、しょんにゃ……んほおおっ！ い、言わないっ！ ローズはイッたりしなひいっ！ ひぐうっ！ あへえああああっっ」

マリンが絶頂しかけ、ローズはあと一步で墮ちることを確信した男たちのピストンがラストパートに入った。パンッ、パンパンッと、乙女の身体は何度も雄々しい牡の肢体に

叩きつけられ、恥ずかしい肉の音を響かせる。

「いやああああっ！ ローズ助けてえっ！ わ、わたしイッチャウ！！ らめらめええっ」
「マリンっ！ あああっ、わたし……わたし……っっ！！」

ローズは両手で顔を覆った。「くおおおっ！ 射精るっ」「ローズにぶっかけてやる！！」と、男たちの声が聞こえた。ローズはもう限界だった。

「ご、ごめんなさいっ！ わ、わたし、わたしもう何回もイッチャウてるのおっ！！ アルテアローズは、さ、最初からオチンポに負けてたのおっっ！！」

赤き炎の戦士、聖なるお姉さんヒロインが、ついに屈服の台詞を叫んだ。天を仰ぎ絶叫すると、解放感とともに恍惚感が襲い、ローズはアクメの彼方へとぶっ飛んでしまう。

（ダメっ、もうダメえっっ！ あああっ、さ、叫ぶのよ！ こっただけいかされるわけには……射精させないとおっ）

「あひいいいいいっっ！ イクッ！！ イクイクイクウウッ！！ 気持ちいいっ！ おまんこハメられてっ、オチンポに虐められるのイイッ！！ マリンごめんなさい、わたしダメなのっ！ マズ牝ヒロインなのっっ！ 虐められるのが大好きなおっっ！！ ああっ、漏れるっ、おしっこ出るうううっ！！」

マゾ豚宣言とともに、ローズはぷしやあああああっっ！ と小水を噴き出した。抑え込んでいた欲望を解き放つたことにより、ローズの膣はこれまでとは比べものにならないほどに大好きな肉棒を締めつける。ヒダが蠢き抜き上げる。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラブ&エロコミック満載!!



隔月発売

大人気PCゲームのコミック多数連載!
キルタイムが敢て連載ヒロインエロス! HEROINE PINCH DA VOL.1



電子版は毎月配信!
書籍版は偶数月発売!

電子書籍も配信中!

二次元 DREAM MAGAZINE ED DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換...不思議Hコミック誌!



隔月発売

コミック UNREAL

ヒロインピンチDX

詳しくはKTCの公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、ダウンロードサイトなどで好評発売中!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。